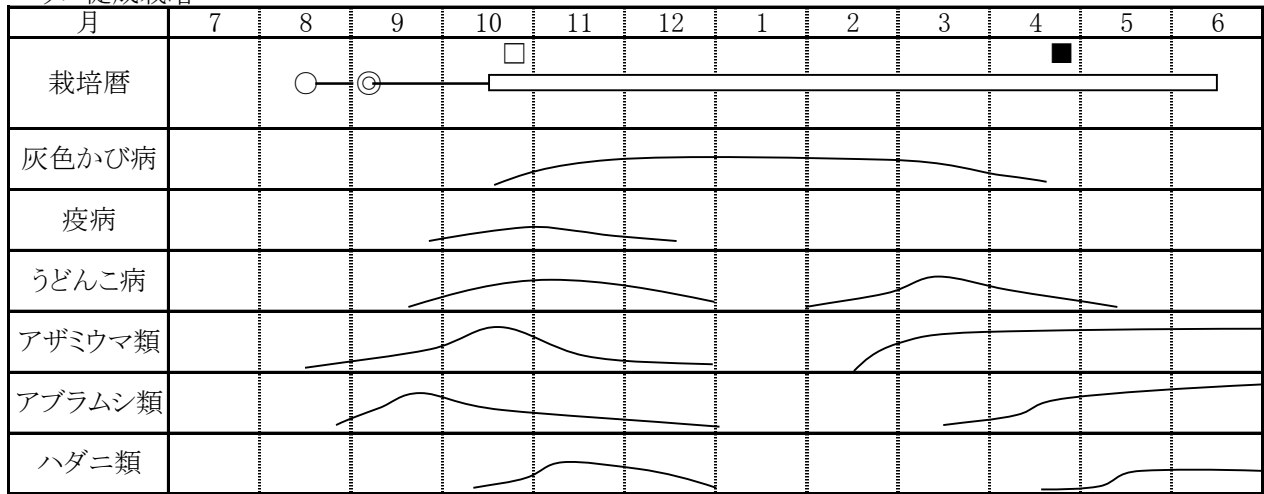


(11) ピーマン

1 主要な作型及び病害虫の発病・加害時期

ハウス促成栽培



2 主要病害虫別防除方法

農薬による防除については、栽培ステージ、病害虫の発生状況等に応じて、散布、灌注、土壌消毒などを行う。
 なお、農薬による防除の際は、農薬登録内容や使用上の注意等を遵守して実施する。

(農林水産省農薬登録情報提供システム <https://pesticide.maff.go.jp/>)

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
モザイク病 (PMoV、CMV、 BBWVなど)	①発病株及び疑似症状株の管理作業は最後に行う。 ②アブラムシの防除対策を行う(アブラムシ類の項参照)(CMV、BBWV)。 ③抵抗性品種を利用する(PMoV)。 ④苗床から生育初期にかけて、発病株の早期発見、早期除去に努める。 【参考事項】 病原は主としてトウガラシマイルドモットルウイルス(PMoV)、キュウリモザイクウイルス(CMV)及びソラマメウイルストウウイルス(BBWV)である(伝染方法は野菜ウイルス病の項参照)。 PMoVは液汁、接触、種子、土壌伝染し、CMV、BBWVは主にアブラムシ類による虫媒伝染する。
青枯病 (細菌)	①連作を避ける。 ②作付け前に土壌消毒を行う(土壌病害虫の防除方法の項参照)。ただし、本細菌は土壌中の生棲深度が40cm以上に及ぶため、下層部まで殺菌作用が及ばない場合がある。 ③排水を良好にし、完熟した有機物を施用する。 ④発病株を早期に発見し除去する。 ⑤土壌害虫を防除する。 ⑥整枝、収穫などの作業に使用するハサミを消毒する。 【参考事項】 高温性の病原菌のため高温時期に発病しやすい。 病原細菌は多種類の作物を侵し、根の損傷部、土壌害虫の食痕などから侵入することが多い。
灰色かび病 (Botrytis)	①換気を図り、多灌水にならないよう注意し多湿を避ける。 ②発病花、枯葉を早期に発見し除去する。 ③被覆資材に近紫外線カットフィルムを用いる。 ④整枝を適正に行い、通風を良くする。 ⑤収穫終了後は残さを持ち出し処分するとともに、ハウスを密閉して高温で蒸込みを行う。 【参考事項】 施設栽培で湿度が90%以上の時に多発する。 発病適温は20℃前後で、湿度が高いと病勢進展は著しい。曇雨天が続くと多発する傾向がある。

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
疫病 (<i>Phytophthora</i>)	①連作を避け、ナス科、ウリ科以外の作物を輪作する。 ②作付け前に土壌消毒を行う。(土壌病害虫の防除方法の項参照) ③排水と換気を良好にする。 ④発病株を早期に発見し除去する。 【参考事項】 ナス、カボチャ、スイカなどにも発病する。
うどんこ病 (<i>veillula</i>)	①密植を避ける。 ②過繁茂にならないよう適正な整枝管理を行う。 ③周囲に寄主植物がある場合は、発病に注意する。 ④収穫終了後残さを処分する。 【参考事項】 発病適温は15～28℃で、やや乾燥条件で多発する。 オクラ、トマト、ナス、キュウリなどに寄生するが、トウガラシ、ピーマン、オクラ以外では孢子形成が少ない。
ミナミキイロアザミウマ	①発生源となる施設周辺の雑草を除去する。 ②施設の開口部に目合い0.4mm以下の防虫ネットや0.8mm目合いの赤色系ネットを張り、侵入を防止する。 ③施設では発生初期に天敵を放飼する。(生物農薬及びフェロモン剤の項参照) ④発生施設では収穫終了後密閉し、高温にして殺虫する。 【参考事項】 多発してからでは防除が困難なため、早期発見し、低密度時に防除を徹底する。 ピーマンのほかナス、キュウリ、スイカ、メロン、ホウレンソウ、キク、シクラメンなど多数の農作物や雑草に寄生する。
アブラムシ類	①発生源となる施設周辺の雑草を除去する。 ②施設の開口部には防虫ネットを張り、侵入を防止する。 ③施設では発生初期に天敵を放飼する。(生物農薬及びフェロモン剤の項参照) 【参考事項】 モザイク病の病原ウイルスを媒介する。 モモアカアブラムシは生長点付近や花蕾に、ワタアブラムシは中、下位葉に寄生する傾向が強い。
ハダニ類	①施設周囲の雑草はハダニの発生源となるので除草する。 ②施設では発生初期に天敵を放飼する。(生物農薬及びフェロモン剤の項参照) 【参考事項】 多発してからでは防除が困難なため、早期発見し、低密度時に徹底防除する。
センチュウ類(ネコブセンチュウ、ネグサレセンチュウ)	①対抗植物と輪作するか前作に対抗植物を栽培する。 ネコブセンチュウにはギニアグラス、クロタリヤ、マリーゴールドなどが有効。 ネグサレセンチュウにはハブソウ、マリーゴールドなどが有効。 ②太陽熱消毒を行う(土壌病害虫の防除法の項参照)。 ③有機物を施用する。 【参考事項】 対抗植物を栽培する場合は根量を十分確保することが効果を高めるポイントなので、十分な栽培期間を確保する。 また、対抗植物は品種・系統により効果に大きな差があるので、効果の高い品種を選定する。 有機物を施用すると、土壌中の生物相が豊かになり、センチュウ類の天敵も増加するため、相対的に有害土壌線虫の密度が減少する。